

Japan Century Symphony Orchestra

March 2023

3

3月 演奏会

3・9* 第271回定期演奏会

3・31金 ハイドンマラソン HM.30

 日本センチュリー交響楽団

3.9木

19:00開演

第271回定期演奏会

ザ・シンフォニーホール

センチュリー・ユースオーケストラによる 第6回 プレコンサート
(18:40頃より舞台上にてお届けいたします)

【曲目】 エワルド：金管五重奏曲 第1番より 第1楽章、第3楽章

【演奏】 トランペット：福元 昂、潮田 彩花 ホルン：中島 謙太

トロンボーン：小手川 裕子 バス・トロンボーン：田中 ほのか

J. シュトラウスⅡ：皇帝円舞曲 作品437

J. Strauss II: Kaiser-Walzer, Op. 437

コルンゴルト：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

E. W. Korngold: Concerto for Violin and Orchestra in D major, Op. 35

I. Moderato nobile II. Romance: Andante III. Finale: Allegro assai vivace

休憩 Intermission

アイネム：フィラデルフィア交響曲 作品28

G. v. Einem: Philadelphia Symphony, Op. 28

I. Allegro giusto II. Andante III. Allegro vivace

ラヴェル：ラ・ヴァルス

M. Ravel: La Valse

指揮：川瀬 賢太郎

Conductor: Kentaro Kawase

ヴァイオリン：ティモシー・チューイ

Violin: Timothy Chooi


管弦楽：日本センチュリー交響楽団

Orchestra: Japan Century Symphony Orchestra

コンサートマスター：荒井 英治 (日本センチュリー交響楽団 首席客演コンサートマスター)

Concertmaster: Eiji Arai

主催 公益財団法人日本センチュリー交響楽団


助成  文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人アフィニス文化財団 エチケット


AFFINIS
ÉTIQUETTE

協力  日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION

特別協力 Supported by  日本 THE NIPPON
FOUNDATION



© Yoshinori Kurosawa

指揮
川瀬 賢太郎

Conductor
Kentaro Kawase

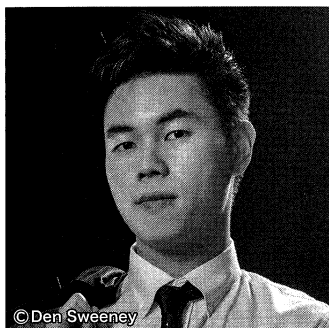
1984年東京生まれ。私立八王子高等学校芸術コースを経て、2007年東京音楽大学音楽学部音楽学科作曲指揮専攻（指揮）を卒業。これまでに指揮を広上淳一、汐澤安彦、チョン・ミョンフンなどの各氏に師事。2006年10月、東京国際音楽コンクール〈指揮〉において2位（最高位）に入賞。その後、各地のオーケストラから次々に招きを受ける。2011年4月には名古屋フィルハーモニー交響楽団指揮者に就任、2014年4月より神奈川フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者に就任（2022年3月末まで）。卓越したプログラミングを躍動感あふれる演奏で聴衆に届けている。

海外においてもイル・ド・フランス国立オーケストラとの共演や、ユナイテッド・インストゥルメンツ・オヴ・ルシリンと共演。

オペラにおいても、細川俊夫作曲「班女」、「リアの物語」、モーツァルト作曲「フィガロの結婚」、ヴェルディ作曲「アイダ」などを指揮、目覚ましい活躍を遂げている。

現在、名古屋フィルハーモニー交響楽団正指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢パーマナント・コンダクター、札幌交響楽団正指揮者、三重県いなべ市親善大使。

2015年渡邊暁雄音楽基金音楽賞、第64回神奈川文化賞未来賞、2016年第14回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第26回出光音楽賞、第65回横浜文化賞文化・芸術奨励賞を受賞。東京音楽大学作曲指揮専攻（指揮）特任講師。2023年4月より名古屋フィルハーモニー交響楽団第6代音楽監督に就任。



ヴァイオリン
ティモシー・チューイ

Violin
Timothy Chooi

情熱的な演奏と幅広いレパートリーで世界的な支持を集めているティモシー・チューイは、カーティス音楽院でアイダ・カヴァフィアンとパメラ・フランクに、ジュリアード音楽院のディプロマ・コースでキャサリン・チョーに、クロンベルク・アカデミーではクリスティアン・テツラフに師事した。

2018年ハノーファー・ヨーゼフ・ヨアヒム国際ヴァイオリン・コンクール優勝、2019年エリザベート王妃国際音楽コンクールで2位受賞の他、マイケル・ヒル国際ヴァイオリン・コンクール（ニュージーランド）、モントリオール交響楽団のマニユライフ・コンクールなど権威あるコンクールで受賞している。ヴェルビエ音楽祭で有望な若手演奏家に贈られるPrix Yves Paternotを受賞した。近年、ソリストとして初共演したオーケストラには、ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団、シカゴ交響楽団、ロシア・ナショナル管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、モントリオール交響楽団、ルクセンブルク室内管弦楽団、ハノーファー北ドイツ放送フィルハーモニー管弦楽団、トロント交響楽団がある。音楽を通じた社会活動に積極的であり、自身が共同設立したアンサンブル「The VISION Collective」は2020年、ハロルドW.マッグロウ・ファミリー財団から音楽教育とコミュニティアウトリーチにおけるロバート・シャーマン賞を受賞した。また、教育面にも力を入れており、オタワ大学音楽学部でヴァイオリン教授として後進の指導にあたっている。

使用楽器は日本音楽財団保有のストラディヴァリウス1709年製ヴァイオリン「エンゲルマン」。

ストラディヴァリウス1709年製ヴァイオリン「エンゲルマン」

このヴァイオリンは、アメリカ海軍士官ヤング中佐が第二次世界大戦中に戦死するまで、約150年間ヤング家に大切に保管されていたため、保存状態が優れている。当財団が保有する以前は、アメリカのアマチュア・ヴァイオリン奏者で収集家のエフレイム・エンゲルマンが所有していたため、現在はこの名前で見られている。

日本音楽財団

NIPPON MUSIC FOUNDATION

日本音楽財団は、1974年に日本国内の音楽文化の振興と普及を目的として設立され、創立20年を迎えた1994年からは、西洋クラシック音楽を通じた国際貢献を目的として、弦楽器名器の貸与事業を行っています。保有する世界最高クラスの弦楽器を21挺（ストラディヴァリウス製ヴァイオリン15挺、チェロ3挺、ヴィオラ1挺、ガルネリ・デル・ジェス製ヴァイオリン2挺）を若手有望演奏家や世界で活躍する演奏家に国籍を問わず無償で貸与し、同時に、これら世界の文化遺産ともいわれる名器を次世代に継承するための保守・保全を行っています。また、楽器被貸与者による演奏会を日本国内外で開催し、名器の音色に触れる機会を提供しています。日本音楽財団の事業は、日本財団の全面的な支援により実施されています。

川瀬賢太郎を指揮者に迎えた今回の定期演奏会のテーマは「ウィーン」。それも直球勝負だけではなく、カーブ、シンカー、フォークと野球の投手が投げる球種のように多彩な曲目が揃いました。ウィンナ・ワルツに始まり、ウィーンで名を馳せた天才作曲家の作品、そしてこれもウィーンで活躍した作曲家の思いがけずウィーンで初演された曲、最後はウィンナ・ワルツへのオマージュで締めくくられます。

J. シュトラウス II / 皇帝円舞曲 作品437

ヨハン・シュトラウス二世 (1825-1899) は「ワルツ王」と呼ばれ、19世紀末に活躍したウィーンの人気作曲家でした。同世代のウィーンで活動する作曲家といえば8歳年下のブラームスが思い浮かびます。ブラームスはシュトラウスの友人であり、決して自分では書くことのできない軽妙な音楽に相当入れ込んでいました。シュトラウスと同姓同名の父は「ワルツの父」、二人の弟ヨゼフ、エドゥワルトも作曲家であり、シュトラウス一族の「ウィンナ・ワルツ」で、人々は踊りに明け暮れたのです。ヨハン・シュトラウス二世は「ワルツ王」と称され、数々のワルツを書きました。

《皇帝円舞曲》は「カイザー・ワルツ」としても知られる1889年(74歳)の作品。1889年10月21日にベルリンの新しいコンサートホールである「ケーニヒツパウ(国王の建築)」のこけら落としの一環で作曲者自身の指揮で初演されました。

コルンゴルト / ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト (1897-1957) は、モラヴィアのブルーノ(現チェコ)に生まれました。子供の頃にウィーンに引っ越して同地で育ち、「モーツァルトの再来」と言われた音楽的才能を発揮します。ところが次第に世情は不安定になり、1930年代に入るとヨーロッパは深刻な金融恐慌に陥ります。その後ドイツでナチスが政権を獲得し、時代は闇の中へ突入して行くのです。1934年にコルンゴルトはアメリカへ亡命しました。自らのスタイルを変えることなく、ハリウッドで映画音楽に取り組みます。この響きが、その後のハリウッドで今日に至るまでの映画音楽の伝統となりました。

《ヴァイオリン協奏曲》は1945年(48歳)の作曲です。第二次世界大戦中は演奏会用の作品を封印して映画音楽を書き続けていたコルンゴルトですが、同じく亡命してきたヴァイオリニストのブロンスラフ・フーベルマンに説得されて書いた作品でした。1947年2月15日にヤッシャ・ハイフェッツの独奏と、ウラディミール・ゴルシュマン指揮セントルイス交響楽団の演奏によって初演されます。当初はあまりに甘く、明確な調性感を持った音楽が時代錯誤と酷評されましたが、作品を愛したハイフェッツが演奏し続けたことで次第に世に知られることとなりました。

3つの楽章で構成。〈第1楽章〉冒頭から濃厚な独奏ヴァイオリンの歌い込みが甘美で抒情的なメロディを歌い上げます。どこまでも続く高揚感が魅力的な音楽です。〈第2楽章〉でも美しいヴァイオリンの歌が続きました。〈第3楽章〉はまさにハリウッド映画を感じさせるゴージャスな響きと独奏ヴァイオリンの技巧的な動きが満載です。いずれの楽章でも、コルンゴルトがこれまでに手がけた映画音楽が素材として使われました。第1楽章は1937年の《砂漠の朝 (Another Dawn)》のテーマを原型として、1939年の《革命児フアレス (Juarez)》の「カルロッタの主題」が中間部以降に登場します。第2楽章の独奏ヴァイオリンが奏でる

主題は1936年の《風雲児アドヴァース (Anthony Adverse)》から。第3楽章の第2主題は1937年の映画音楽《放浪の王子 (The Prince and the Pauper)》からとられました。

アイネム／フィラデルフィア交響曲 作品28

ゴットフリート・フォン・アイネム (1918-1996) は20世紀にウィーンで活躍した作曲家。スイスのベルン生まれですが、ベルリンで音楽を学んで、この地でそのキャリアをスタートさせました。1953年以降はウィーンを本拠として要職や教授職に就きつつ、作曲活動も続けます。先達であるストラヴィンスキーやプロコフィエフの音楽の影響を受け、保守的な作風を貫きました。《フィラデルフィア交響曲》とは唐突な題名に思えますが、ニューヨークの南西150kmに位置するペンシルベニア州最大の都市であるフィラデルフィアの名前が冠されています。それもそのはず、この作品はフィラデルフィア音楽アカデミーの委嘱で1960年 (42歳) に作曲した作品なのです。1961年10月5日にユージン・オーマンディ指揮のフィラデルフィア管弦楽団により行われる予定でしたが、これは実現せず、1961年11月12日にウィーンのエムジークフェラインザールでゲオルク・ショルティ指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が初演しています。3つの楽章で構成。〈第1楽章〉は木管楽器によるコラル風の主題が弦楽器に受け継がれて開始されます。ところどころに響きのスパイスを効かせながら展開される見通しの良い音楽になりました。〈第2楽章〉は穏やかで広がりを感じられる主題がクラリネットで奏でられて始まります。楽想が変わると、どこかで聴いたような律動的なリズムが刻まれます。どこにも言及は無いのですが、ベートーヴェン「第九交響曲」第2楽章へのオマージュに聞こえて仕方がありません。〈第3楽章〉ではサンバのリズムを取り入れつつ、様々な表情が織り混ざる音楽が形成されました。全曲を通して、プロコフィエフの「古典交響曲 (交響曲第1番)」同様に20世紀のハイドンを目指したとみなしてよい音楽です。

ラヴェル／ラ・ヴァルス

モーリス・ラヴェル (1875-1937) はフランス近代を代表する作曲家です。「スイスの時計技師」とも呼ばれ、彼の音楽には、触れればすぐに壊れそうなガラス細工にも似た繊細さと、これではあり得ないと思わせる完成度の高さが共存しています。

《ラ・ヴァルス》は極めて研ぎ澄まされた構成を持っています。1919年から翌1920年 (45歳) にかけてオーケストラ作品として書かれたのですが、同時期にラヴェル自身によるピアノ独奏用編曲、また2台のピアノのための編曲も生まれています。管弦楽版は1920年12月12日にパリでカミーユ・シュヴィヤール指揮のラムルー管弦楽団によって初演されました。20世紀のバレエの立役者であるディアギレフの委嘱があったと伝えられますが、完成した作品を彼は受け取っていません。バレエ上演は実現せず、ラヴェルとディアギレフは仲違いをしたのです。1929年になってから、ようやくバレエとしてイダ・ルービンシュテインにより上演されました。ルービンシュテインは同じラヴェルの《ボレロ》を委嘱して、バレエとして上演したロシアの舞踏家です。楽譜には、「逆巻く雲の間から稲妻が光り、ワルツを踊るカップルたちを垣間見せる。雲は次第に消え、旋回する群衆でいっばいの巨大な広間があらわれる。ステージは徐々に明るくなる。天井から放たれるシャンデリアのきらめきは最高潮に達した。1855年頃の (オーストリア) 帝国宮廷の風景である」とあります。ここで描かれたのはウィンナ・ワルツへのオマージュです。映し出される世界は、茫洋としてはいはつきりとしません。華やかな舞踏会ではなく、鈍くざらりと光るほの暗い響きには、当時終戦直後であった第1次世界大戦の影を感じ取ることができます。独特の退廃的な香りが例えようもない魅力を放つ音楽です。 (小味淵 彦之)